縄 文 時 代 草 創 期

小田川　哲　彦

調査の現状

青森県の縄文時代草創期は、昭和50年の青森県立郷土館が行った蟹田町大平山元Ⅰ遺跡発掘調査での無文土器出土を契機にする（三宅 1975）。昭和58年には当センターが発掘調査を行った八戸市鴨平(2)遺跡で爪形文系土器が出土し（春日 1983）、行政発掘のうえでも草創期という時期が認識されることとなる。この後昭和61・62年に六ヶ所村発茶沢(1)遺跡（畠山他 1986）、同表館(1)遺跡（三浦 1989）を発掘調査し、双方から隆起線文系土器が出土し、それまで不鮮明であった本県の草創期文化が強く意識されるようになる。その後、平成10年に発掘調査した八戸市櫛引遺跡では、多縄文系土器とこれに伴う竪穴住居跡と土坑、集石跡が検出されたほか（小田川・坂本 1999）、階上町滝端遺跡からは、爪形文系土器と集石遺構、竪穴状遺構が検出されている（森・市川 2000）。このように近年の調査により、草創期の資料は徐々に蓄積され土器型式も出揃ってきている。

県内の草創期の遺跡と当該時期の所産と考えられる遺物については、平成11年、平成12年と相次いで刊行された東北町長者久保遺跡と蟹田町大平山元Ⅰ遺跡の再調査報告書の中で詳細にまとめられている（谷口1999、福田2000）。両遺跡ともに次代への画期に位置し、縄文文化形成期の遺跡として注目され、縄文時代草創期を考えるうえで大きな調査成果をあげている。

この時期の遺跡と遺物は、現在調査中のものをあわせて22カ所知られているが（福田2000）、多くは断片的な資料で、その中には旧石器時代の遺物として報告されているものも含まれており再検討の必要がある。これらの分布は県東部と南部の太平洋側に集中しており、津軽地方での発見例は今のところ大平山元Ⅰ・Ⅱ遺跡と弘前市独狐遺跡だけである。草創期遺跡の分布傾向は、縄文時代早期の分布と共通するものである。

遺構

県内の遺構検出例は、今のところ２遺跡だけである。櫛引遺跡から竪穴住居跡２軒、土坑６基、集礫が検出されている。竪穴住居跡は不整な円形で、規模は6×5.5ｍ、深さは約１ｍである。炉跡と柱穴は検出されなかった。また、住居跡から約３ｍ離れて集礫が検出されている。礫は被熱したものが多く屋外炉として使われていたものと思われる。

八戸市櫛引遺跡遺構

土坑は、住居跡の周囲約10ｍの範囲から検出されている。形状は不整な円形および楕円形で、大きさは１～1.3ｍ、深さは50㎝前後である。第１号土坑からは復元個体１個のほか、小型土器を含む複数個体の土器片が出土しており、土坑墓の可能性も考えられる。これらは多縄文系土器期の遺構として捉えられるもので、東北地方北部の草創期の遺構としては初例となった。

滝端遺跡からは竪穴状遺構１基、集石遺構が検出されている。竪穴状遺構は楕円形で、規模は2.1×1.9ｍ、深さは50㎝である。集石遺構は径が1.3ｍ程の円形の掘り方をもち、覆土の上面から被熱した70数点の礫と礫片が出土している。

櫛引遺跡での竪穴住居跡検出例は、季節的定住か通年定住かの議論もあるが、群馬県西鹿方中島遺跡などの例からも、この時期すでに集落としての定住化が広域的に確立していたことを示すものと思われる。今後、集落の立地条件や各遺構の形態や配置など他遺跡との比較から生活様式を考えるうえでも良好な資料となるものである。

土器編年と今後の課題

大平山元Ⅰ遺跡の無文土器出土は（三宅 1975)、それまで不明であった本県の縄文文化の年代を一気に草創期初頭まで遡らせ、以後、早期前半までの間を繋ぐ各土器型式の発見が課題となっていた。その後、前述の出土資料によって、本県の土器編年も全国的な編年体系に対比させ得る状況になってきているが、各土器型式の変遷からみれば細部で欠落しているものがあると考えられる。

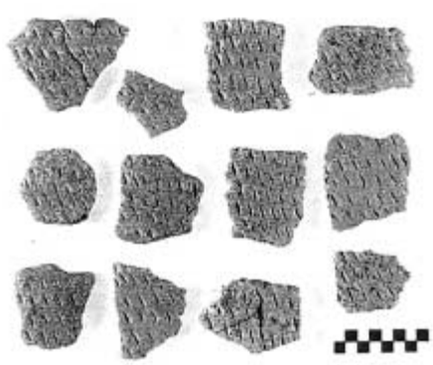
草創期の土器型式編年については、諸説論じられているが、大枠では無文土器群→隆線文系土器群→爪形文系土器群→多縄文系土器群の流れで把握されるものである。

昭和24年の長者久保遺跡石器群の発見から約40年、長者久保・神子柴文化期に土器が共伴することが大平山元Ⅰ遺跡の再調査（谷口 1999）でさらに明らかとなり、また、その土器は較正暦年代測定から 16,000～16,500 cal Ｂ.Ｐ.という年代が示された。これは、従来の年代を約4,000年ほど古く遡るもので土器の起源を探るうえで注目され反響をよんだ。

表館(1)遺跡出土の微隆起線文土器は隆起線文系土器群の中でも新段階のもので、より古段階の土器からの移行が問題とされ、その間に位置づけられる豆粒文土器など未発見の土器の発見が期待される。

爪形文系土器は断片的なものも含め遺跡数は多いものの、器形を把握できる資料はない。今年度調査された南郷村黄檗遺跡では、２ｍ程の範囲から爪形文土器片のみが約160点程出土しており、この中からは複数の個体が認められた。この爪形文土器のみの出土例は、鴨平(2)遺跡のほか滝端遺跡にも共通するものであるが、土器にやや違いが認められる。黄檗遺跡と鴨平(2)遺跡の土器は胎土に雲母片を多量に含むが、滝端遺跡出土土器には雲母片は含まれず、その違いは時間差によるものではないかとしている（森・市川 2000)。本土器群の単独出土と他土器との共伴出土は、依然として問題であり位置づけは今後の土器編年を左右する意味でも注目される。

六ヶ所村表館(1)遺跡
出土隆起線文系土器



八戸市鴨平(2)遺跡
出土爪形文系土器

八戸市形櫛引遺跡出土
多縄文文系土器

櫛引遺跡出土の多縄文系土器は、本県の土器型式間の空白を埋めるだけではなく、その特徴的な器形の共通性は室谷下層式と明確な繋がりを示すもので、分布圏を広げた点でも意義がある。報文中で筆者は、室谷下層第９層段階以降に併行する単一の土器群と考え多縄文系土器群の後半から末葉に位置づけたが、文様要素のバリエーションには室谷下層式土器と相違点が多々見受けられ、再度分析検討の必要がある。編年的には、前段階の押圧縄文系土器が滝端遺跡から１点出土しているほか（報告書中では不確定要素が強く早期の遺物として掲載されている:報告者と確認了承済み）、後続する土器群の発見がまたれるところである。

また、前述の爪形文土器との関わりも避けられない問題である。爪形文土器単独段階説と爪形文、押圧・回転縄文併存説があるなか、櫛引遺跡出土の爪形文土器は多縄文系土器と同一層中にあり、その前後関係を把握することは難しい。各土器片の胎土や施文の違いはもとより、県内の爪形文単独出土例の層位的前後関係を把握し対比させることが今後必要である。

草創期遺物の出土層位については、火山砕屑物との関係を太田原潤氏が大平山元Ⅰ遺跡の再調査報告書の中でまとめている（太田原 1999）。県南部の遺物は例外なく南部浮石層の下位にあり「多縄文系土器、爪形文系土器は二ノ倉火山灰堆積前後、隆起線文系土器は千曳浮石層堆積以後、神子柴・長者久保系石器群は千曳浮石層および八戸火山灰堆積以前の時期に位置づけられる」としている。

石器群については、大平山元Ⅰ遺跡以外に出土数も少なく、明確に把握されているものはない。櫛引遺跡では石器群の特徴について特に触れなかったが、出土地点の異なる局部磨製石斧を除き、縄文時代早期の石器組成と大差ないように思われる。石箆は形態的に早期のものと類似しており、やや違いがみられるのは、削器類の素材剥片が石刃状である点である。他に、滝端遺跡からは竪穴状遺構の覆土から磨製石斧が出土している。

また、今年度調査されている野辺地町明前(4)遺跡では、千曳浮石層から石槍を伴う石器群が検出されており、その中には新潟県小瀬ケ沢洞窟、東京都前田耕地遺跡の尖頭器と類似するものが含まれていることから、調査整理の進展が期待される。

まとめ

このように、本県草創期の遺跡と遺物の研究は今後の調査に待つところが大きく、特に土器型式間の空白を埋める土器の発見が待たれる。また、遺跡数も希少であることから、遺物の科学的分析はさらに重要性を増すものとみられる。更に、本県草創期の様相を一層鮮明にするためにも火山砕屑物の年代と各土器型式の前後関係を把握し他地域との比較検討を進めていくことが必要である。

（青森県埋蔵文化財調査センター文化財保護主査）